

佐佐木 邦子 (1949~2016)

## 矛盾をかかえて生きる東北の人々を生涯をかけて書き続けた。

文学好きの方ならご記憶があるかもしれない。昭和60年(1985)、仙台在住の作家が芥川賞候補となり話題になったことがあった。それが佐佐木邦子さんだった。

当時、佐佐木さんは36歳。30歳を過ぎる頃から頭角を現し、宮城県芸術祭文芸賞、宮城県芸術選奨新人賞を受賞、NHK仙台放送局のラジオ・ドラマコンクールでも最優秀賞になるなど、県内ではその実力が認められつつあった。小説「卵」が昭和60年の中央公論新人賞となり、それが芥川賞候補としてノミネートされたのである。

地方都市で地道に書き続け、ついに認められたことに邦子さんの喜びはひとしおだっただろう。中央公論新人賞の授賞式で、作家・河野多恵子さんからペンネームとして本名の「佐々木邦子」ではなく「佐佐木邦子」を使うことを勧められた。大物作家からの最高のエールに、書き続けることへの意気はさらに強いものになったに違いない。

「高校の頃から書き始めて、学生の頃はガリ版刷りで綴じた小説を、一人、路上で売ってたんですよ」と夫の勉さんは話す。熱い思いは終生変わることなく、結婚して子育てしながらも同人誌に所属し作品発表を続けた。勉さんに「私、書かなければ生きていけない」ともらったこともあった。

「卵」では、社会の中で経済的に自立し生きていくことに居心地の悪さしか感じ得ない男が、主人公として描かれる。「社会に自分の居場所を見つけられない人間。世間からはじき出される人間。恵まれないけれど恵まれたいと願う人の葛藤を描きたかったんででしょうね」と勉さんは分析する。小説に本格的にのめり込んだのは、学生運動が盛んな時代だった。自分自身がもまれる中で獲得した、葛藤を抱える人間への共感や、翻弄されながらも懸命に生きる人々の姿が、生涯をかけて書き続けたテーマとなった。

一方で、東北の農村や漁村に語り継がれてきた民話を古老から聞き取り、執筆する民話採集も大切な仕事だった。「両親とも会津の生まれ。東北の文化が体に染み込んでいるんですよ」と勉さんが話すように、喜怒哀楽の豊かな感情を持って自然とともに暮らす人々の民話は、邦子さんの中に生き生きと宿り、小説の世界を下支えするものになっていたようだ。その成果は『土地に根ざした民話』などの本にまとめられている。

だからこそ、平成23年(2011)の東日本大震災は、衝撃だったろう。津波に襲われた浜を訪ね見た風景、耳にした話は「黒い水」という作品に昇華されていった。震災の1年後、邦子さんは仙台市若林区の津波被害を受けた人々の聞き書きの仕事を引き受け、大津波から逃げ延びた13人の生々しい話を息を詰めるようにして聞いた。1年以上に及ぶ作業が完了した秋のある日、「やっと終わった」と書斎から出てきた邦子さんは夕食の支度を整え、「さあ食べよう」と席に着いた途端、勉さんの目の前で倒れ意識不明となつた。

震災10年目のこの1月、邦子さんの採集した民話とエッセイが『とうほく民話散策』として出版された。鶏、猫、狐、そして河童や鬼とともに生きる愛すべき東北の人々への視線は、あくまでやさしく慈愛に満ちている。享年67歳。

(取材・文／西大立目祥子)

やさしい表情の方だった。  
墓碑は西17区。



西大立目 祥子(にしおおたちめ・しょうこ)  
フリーライター。街歩きガイドなどもつとめる。  
著書に『仙台まち歩き』(河北新報出版センター)など。